

1. 語彙主義 vs. 反語彙主義

生成文法研究において、シンタクスが語と語の併合を司る分野であるとの認識は、その素朴な推論として、「語がシンタクスのインプットになる」という語彙主義的な言語観を醸成してきた。一方、Hale and Keyser (1993) などの統語的な動詞の意味分析や Halle and Marantz (1993) 以降の分散形態論の発展に伴い、動詞が持つ意味情報は統語構造の直接の反映であるとする反語彙主義の考え方が注目され、語彙主義に基づく過去の動詞研究が新たな視点で見直され始めている。

例えば、[x ACT] の単純事象を表す英語の非能格動詞 laugh は、同族目的語構文 (She laughed a cheerful laugh.)、way 構文 (She laughed her way out of the room.)、reaction object 構文 (She laughed her thanks.)、強い結果構文 (She laughed herself sick.) などで他動詞化するが、このとき、動詞と擬似目的語および経路句/結果句を含む動詞句全体は、使役の意味を含む複雑事象を表すため、語彙主義に基づく先行研究では、これらの語句が意味構造で合成されることによって他動詞構文が派生されると分析されてきた (Levin and Rapoport 1988, Levin and Rappaport Hovav 1995, 影山 1996, Rappaport Hovav and Levin 1998, 2001)。しかし、意味構造における合成の可否は、概ねそのアウトプットとなる統語構造 (あるいは項構造) を基に決定されることが多く、反語彙主義的な見方では、このような合成はシンタクスで統語的に行われると見ることもできる。

本稿は、このような動詞研究における語彙主義と反語彙主義の対立を理解する一助となることを目的として、動詞の意味が語形成や構文形成によって拡張される事例を取り上げ、その拡張がレキシコンで行われると分析されるべきか、シンタクスで行われると分析されるべきかを検討する。結論として、動詞の意味拡張には、シンタクスで統語構造に依拠して行われる統語的な意味合成と、レキシコンで統語構造から独立して行われる語彙的な意味合成の両方があることを主張して、語彙主義と反語彙主義の対立に関して一つの理論的示唆を与えたい。

2. 統語的意味合成

まず、動詞の意味拡張がシンタクスで行われると思われる事例として、英語の結果構文を見てみよう。(1) のような非能格動詞の強い結果構文では、主語が起因事象の主体を表し、擬似目的語が結果事象の主体を表すことが知られている。概念意味論的に言えば、前者は ACT の主語であり、後者は MOVE あるいは BECOME の主語である。

- (1) a. The professor laughed the student out of the classroom.
b. The professor laughed himself hoarse.

(1a)は「教授が何かをして、学生が笑いながら教室を出ていった」(=[the professor CAUSE [[the student ACT<laughing>] & [the student MOVE out of the classroom]]]) や「教授が学生を笑い、教授が教室を出ていった」(=[[[the professor ACT<laughing> ON the student] CAUSE [the professor MOVE out of the classroom]]) などの意味にはならず、「教授が学生を笑い、学生が教室を出ていった」(=[[[the professor ACT<laughing> ON the student] CAUSE [the student MOVE out of the classroom]]) としか解釈されない。同様に、(1b)も「教授が笑って、彼自身の声がかれた」(実際は「声がかれるくらい笑った」という誇張表現) としか解釈できない。

このことは、(1)に対応する(2)のような3層分裂 VP 構造 (Fujita 1996) で、2つの v がそれぞれ意味構造における ACT と CAUSE を表象し、V が MOVE や BECOME を表象すると考えれば統語的にうまく記述できる。

- (2) a. [_{VP} the professor_i [_{V'} v(=ACT) [_{VP} t_i [_{V'} v(=CAUSE) [_{VP} the student [_{V'} V(=MOVE) out of the classroom]]]]]]]]
 b. [_{VP} the professor_i [_{V'} v(=ACT) [_{VP} t_i [_{V'} v(=CAUSE) [_{VP} himself [_{V'} V(=BECOME) hoarse]]]]]]]]

ここで、*laugh* という動詞が持つ「声を立てる」などの様態 (*manner*) が、ACT を補充する要素として意味挿入されると仮定すると、(1)の正しい解釈が得られる。

逆に、(1)の上に挙げたその他の解釈がないことは、この意味合成が統語的に行われることを示唆している。意味構造における不可能な合成のパターンをそれぞれ排除することは、理論的には可能だが、それが(2)の統語的な語彙分解と同じだけの説明的妥当性を満たすことは困難である。特に、概念構造における等位接続 (= [[LCS] & [LCS]]) は、影山 (1996) の結果構文の分析や由本 (2005) の複合動詞の分析などでも提案されており、(1a)の不可能な意味を排除するためにこれを破棄すると、彼らの説明は立ち行かなくなる。Levin and Rappaport Hovav (1995) の「直接目的語の制約」も、結果構文の統語的分析の必要性を示している。

このように考えれば、影山 (1996) が指摘している [ACT] CAUSE [ACT] や [BECOME] CAUSE [BECOME]、さらには [BECOME] CAUSE [ACT] のような意味構造を持つ表現が、単一の動詞としてはもちろん、構文的にも存在しないことも、LCS などの意味の制限ではなく、純粹に統語的な制限として説明できる。

- (3) a. *The clown juggled the children laugh(ing). (影山 1996: 282)
 * [_{VP} the clown_i [_{V'} v(=ACT) [_{VP} t_i [_{V'} v(=CAUSE) [_{VP} the children [_{V'} v(=ACT) laugh(ing)]]]]]]]]
 b. *The snow melted the road slushy. (Levin and Rappaport Hovav 1995: 39)
 * [_{VP} the snow_i [_{V'} V(=BECOME) [_{VP} t_i [_{V'} v(=CAUSE) [_{VP} the road [_{V'} V(=BECOME) slushy]]]]]]]]
 c. *The sun set the children go(ing) home. (影山 1996: 282)
 * [_{VP} the sun_i [_{V'} V(=BECOME) [_{VP} t_i [_{V'} v(=CAUSE) [_{VP} the children [_{V'} v(=ACT) go(ing) home]]]]]]]]

要するに、自然言語の可能な動詞句の構成として、v-v-V 以外の構成はすべて統語的に排除される。概念構造を用いた分析では、これらに対して、すべてアドホックな説明を与えざるを得ないだろう。(もちろん、自然言語の統語構造がなぜ v-v-V のような構成になっているのか、という根本的な問いについては、語彙主義と反語彙主義の別を問わず、何らかの回答が必要である。)

また、本稿の分析では、Goldberg (1995) の「単一経路制約」も統語的に説明される。

- (4) a. *He wiped the table dry clean. (Goldberg 1995: 82)
 * [_{VP} he_i [_{V'} v(=ACT) [_{VP} t_i [_{V'} v(=CAUSE) [_{VP} the table [_{V'} V(=BECOME) [_{AP} dry] [_{AP} clean]]]]]]]]
 b. *The vase broke worthless.
 * [_{VP} the vase [_{V'} V(=BECOME) [_{AP} BROKEN] [_{AP} worthless]]]

単一経路制約は、1つの動詞句が表す変化として、2つ以上の異なる経路の叙述を禁止したものであるが、結果句は、統語的に V の補部を埋める要素であり、V が動詞句に 1つしかないことを前提とすれば、結果句が 1つしか生起できないことは当然である。(4b)では、*break* の定項 *BROKEN* が V の補部の位置を埋めているので、新たな結果述語 *worthless* は生起できない。(4a)に関して、結果句を等位接続した *He wiped the table dry and clean.* が適格になることは、単一経路制約が意味の問題ではなく、純粹に統語的な問題であることを物語っている。

このほか、同族目的語構文 (*She laughed a cheerful laugh.*)、*way* 構文 (*She laughed her way out of the room.*)、*reaction object* 構文 (*She laughed her thanks.*) なども、余分な語彙規則を仮定せず、同様の統語的な記述が可能であると思われる。それぞれの詳しい分析は、稿を改めて論じたい。

3. 語彙的意味合成

次に、動詞の意味拡張がレキシコンで行われていると考えられる例として、日本語の語彙的複合動詞を考えてみよう。日本語の語彙的複合動詞では、他動性調和の原則 (影山 1993) により、英語のような起因事象 + 結果事象の組み合わせ (*撃ち死ぬ、*叩き壊れる) は起こらず、前項動詞と後項動詞の間に外項の有無に関する齟齬がない限り、統語上、重複する構造を持つ動詞同士でも様々な合成が可能である。

- (5) a. 他動詞+他動詞：買い取る、追い払う、射抜く、突き倒す
- b. 非能格+非能格：言い寄る、飛び降りる、暴れ回る、遊び暮らす
- c. 非対格+非対格：滑り落ちる、居並ぶ、生え変わる、張り裂ける
- d. 非能格+他動詞：泣きはらす、笑い飛ばす、乗り換える、泣き落とす
- e. 他動詞+非能格：待ち構える、探し回る、待ち暮らす

これらを統語構造上でそのまま合成しようとする、語彙的複合動詞に対しては v-v-V の構造を拡大することになり、先の結果構文の分析との整合性が保たれない。

斎藤 (2014) は、分散形態論の考え方を応用し、語彙的複合動詞の前項動詞(V1)と後項動詞(V2)を主要部の段階で結合し、複合動詞としての新たな主要部を形成するという構造 (= [v V1+V2]) を提案している。しかしながら、このような合成は、語彙的複合動詞の主要部の選択に関して重大な問題を孕んでいると思われる。語彙的複合動詞は、出来上がった語の意味に応じて、V1 が主要部となる場合 (晴れ渡る、生き急ぐ) も V2 が主要部となる場合 (押し倒す、歩き疲れる) も、さらには両方が主要部となる場合 (恋い慕う、慣れ親しむ) もある (影山 1993, 由本 2005)。斎藤の提案する構造では、複合動詞全体の主要部を決めることはできず、V1 と V2 の項関係も捉えられない。

さらに、反語彙主義の立場では、藤田・松本 (2005) が語彙的複合動詞に対して、(6a)の構造を提案している (ここでは3層分裂 VP ではなく、2層分裂 VP が採用されている)。

- (6) a. 「語彙的」複合動詞：[_{vP} Subj [_{v'} [_{VP2} [_{VP1} Obj V1] V2] v2]]
 - b. 「統語的」複合動詞：[_{VP2} Subj [_{v'} [_{VP2} [_{TP} Spec [_{T'} [_{VP1} Subj [_{v'} [_{VP1} Obj V1] v1]]] T]]] V2] v2]]
- (藤田・松本 2005: 88)

(6a)の構造は、前項動詞(V1)が VP のレベルまでしか投射しないことによって、それより大きい vP や TP を対象とする統語操作 (例えば、受動化や主語尊敬語化) を受けないことを捉え、語彙的複合動詞が持つ「語彙的緊密性」を統語的に説明している。

しかし、この説明が成り立つためには V1 が外項を導入しないと仮定する必要があるが、実際には、「飛び降りる」や「待ち構える」など、V1 には外項を導入すると考えられる非能格動詞や他動詞が問題なく生起できる。また、松本 (1998) が「副詞的關係」と呼んだ、次のような語彙的複合動詞の外項は、意味的に V1 に由来するとは考えられない。

- (7) a. 太郎は花子と同じ電車に乗り合わせた。
- b. 次郎は今月のお小遣いを使い果たした。

(7a)は「太郎が乗った電車が、たまたま花子が乗った電車と同じだった」という意味で、太郎が花子に合わせて同じ電車に乗ったわけではない。(7b)も「次郎が小遣いを使い続けた結果、意図せずお金がなくなった」のであり、小遣いを使い切るという目的を果たしたわけではない。これらの複合動詞の主語はいずれも動作主

であり、かつ V1 の項としか解釈できない。しかしながら、「乗り合わせる」も「使い果たす」も V1 の受動化 (*小遣いが使われ果たした) や主語尊敬語化 (*電車にお乗りになり合わせた) が不可能であるという語彙的緊密性を保っている。これらの複合動詞は、影山 (2013) が「語彙的なアスペクト複合動詞」と呼んだもので、その項関係は V1 によって決まることが分かっている。

また、(6a)の構造は、統語的に非対格+非能格(他動詞)の構造になっているが、すでに述べたように、日本語の語彙的複合動詞では、他動性調和の原則があるため、基本的にこの組み合わせは容認されない。

- (8) a. 非対格+非能格: *転び降りる、*流れ回る、*明け暮らす
b. 非対格+他動詞: *売れ飛ばす、*揺れ起こす、*崩れ落とす、*呆れ返す

さらに重要なのは、語彙的複合動詞には、その種類によって生産性の違いがあることである。由本 (2013) は、語彙的複合動詞に関して、V2 の概念構造に V1 の意味情報を「補充」するタイプの複合動詞(たたき壊す)が、V2 の概念構造に V1 の意味情報を新たに「付加」するタイプの複合動詞(泣き落とす)よりも生産性が高いことを観察している。影山 (2013) も、語彙的なアスペクト複合動詞の V2 は限られた V1 としか結びつかないことを指摘して、統語的なアスペクト複合動詞との差異に言及している。このような違いは、V1 と V2 の意味構造を精査しなければ見えず、語彙的複合動詞に(6a)の構造を付与するだけでは説明ができない。一般に、シンタクスにおける統語構造を用いた操作は、生産性の差を生み出すようには設計されていない。

以上より、日本語の語彙的複合動詞は、その名のとおり、レキシコンで語彙的に合成されると考えるのが妥当である。なお、レキシコンで行われる語彙的な意味合成であっても、最終的にそのアウトプットは統語構造を用いて音声化されるので、「*軍曹が倒れ死ぬ」や「*ビンを傾け空ける」など、経路 (MOVE) と結果状態 (BECOME) が同時に表現されるような複合動詞は許容されない(上例(4)を参照)。影山 (1993) は、この問題を回避するため、日本語の語彙的複合動詞は概念構造ではなく、項構造のレベルで形成されると述べているが、その主張自体がこれらの複合動詞が最終的に統語構造の制約を受けることを認めており、英語の強い結果構文と日本語の語彙的複合動詞の形成は、合成の領域がシンタクスとレキシコンで異なっているものの、影山が言うように、両言語で合成プロセスの存否に違いがあると考えする必要はない。

4. 統語的意味合成の条件

これまでの議論で、日英語の動詞の意味拡張を見る限り、統語的な意味合成と語彙的な意味合成の両方が必要であることが分かる。最後に、本節では、この両者を分ける条件について考えてみたい。これによって、日英語の動詞の意味拡張の方策の違いがさらに明らかになる。

まず、本稿の分析に従えば、日本語に強い結果構文がない(*ジョンはパン生地を薄く叩いた)理由は、日本語の結果構文が(2)の構造条件を満たさないからだと言える。Son and Svenonius (2008) によると、日本語の形容詞句(例:「薄く」)は、結果構文で行為の結果を表す Res(ult) の投射を具現化する機能が欠けている。これを本稿の枠組みに置き換えると、日本語の形容詞句には、V(=BECOME)を導入する機能がなく、動詞自体が結果状態を含意する場合を除いて結果構文が形成できない。また、加藤 (2007) は、日本語の形容詞句形は範疇的に形容詞ではなく様態副詞だと主張している。いずれにせよ、強い結果構文における統語的な意味拡張はシンタクスで自由に行われるわけではなく、V(=MOVE)あるいはV(=BECOME)を動詞句内に新たに導入できる結果述語(典型的には、形容詞句や前置詞句/後置詞句)があることが条件である。

また、次のような英語の非能格自動詞による単純な使役他動詞化は、たとえ意味的にそのような状況が容易に想像できるとしても(すなわち、意味構造上は可能だととしても)不可能である(上例(3a)を参照)。

- (9) a. *The teacher studied his students very hard. (「学生を勉強させる」の意味で)

b. *The clown laughed the children. (影山 2000: 46)

同様に、「往来・発着」や「出現・発生」を表す英語の非対格動詞も、動詞単独では使役他動詞化しない。

(10) a. *The collaborators escaped the convict./*The teacher came the student to school.

b. *The careless driver occurred the car accident./*The magician appeared a pigeon from his hat.

日本語では、これらの状況は、「逃がす」や「起こす」などの1語の使役他動詞を使うか、それが無い場合は、動詞に使役を表す形態素-(s)aseを付加することで適切に表現できる。特に、「逃がす」や「起こす」に含まれる-asや-osなどの形態素は、動詞の語根(nig-やok-)に合成されてvを具現化し、動作主を導入する要素と捉えることが可能であり、これらの文が意図する動詞の意味が、統語的に不適格になるとは考えられない。英語でこれらの表現が不可能なのは、英語に動詞の意味を生産的に拡張させる形態素がないからであり、すべての意味拡張が統語構造の適格性だけを基準に行われると考えることはできない。

日英語の違いとして、さらに、補助動詞を用いた日本語の受益構文と英語の二重目的語構文の違いも挙げられる。

(11) a. 僕は花子にドアを開けてやった。

b. *I opened Mary the door. (Shibatani 1996: 170)

日本語の受益構文は英語の二重目的語構文よりも表せる意味の範囲が広く、動詞そのものに所有の概念がなくても、補助動詞「やる」を付加することで多様な受益関係を表すことができる。工藤(2010)では、これをレキシコンにおける主動詞と補助動詞の意味合成の結果と分析しているが、本稿の趣旨に沿って述べれば、補助動詞「やる」が主動詞「開ける」を補部に取りることによって起こる統語的な意味合成であると考えられることもできる。いずれにせよ、このような形態素を持たない英語では、同様の合成は不可能である。

以上のことを総合すると、統語的な意味合成の条件として、(12)の仮説が導かれる。

(12) シンタクスにおける統語的な意味合成が起こるのは、形態統語的に顕在的な統語ユニットが存在し、併合により句構造が形成される場合に限られる。

この仮説の妥当性を検証するのは、今後の課題としたい。

5. 結語

本稿は、動詞の意味拡張には、シンタクスで統語構造に依拠して行われる統語的な意味合成と、レキシコンで統語構造から独立して行われる語彙的な意味合成の両方があることを主張した。本稿の分析では、これまで語彙的だと分析されてきたいくつかの動詞の意味拡張は、シンタクスで統語的に行われると理解できるものがある。ただし、例えば、分散形態論が主張するように、すべての語の意味が統語構造で一律に扱えると考えるには、未だクリアしなければならない課題が多く残っているように思われる。特に、日本語のように豊富な形態素を揃え、多様な意味合成のパターンが可能な言語では、反語彙主義的な語形成の在り方を慎重に検討する必要がある。

最後に、本稿は、動詞単独の意味構築がシンタクスで行われるか否か、という語彙主義と反語彙主義の対立を巡る最も重要な議論には踏み込んでいないものの、少なくとも動詞の意味拡張に関しては、レキシコンで行われるものとシンタクスで行われるものの両方があることを主張したものであり、極端な語彙主義や極

端な反語彙主義ではなく、両者の中庸にこそ言語の本質があることを強く示唆するものである。

参考文献

- Fujita, Koji (1996) Double objects, causatives and derivational economy. *Linguistic Inquiry* 27: 146-173.
- 藤田耕司・松本マサミ (2005) 『語彙範疇(I): 動詞』 東京: 研究社.
- Goldberg, Adel E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser (1993) On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In: Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*. 53-109, Cambridge, MA: MIT Press.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) Distributed morphology and the pieces of inflection. In: Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*. 111-176, Cambridge, MA: MIT Press.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論: 言語と認知の接点』 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」 丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』 33-70. 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系: その理論的・応用的意味合い」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端: 謎の解明に向けて』 3-46. 東京: ひつじ書房.
- 加藤鉦三 (2007) 「日本語結果述語は動作オプション表現である」 小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』 217-248. 東京: ひつじ書房.
- 工藤和也 (2010) 「日本語直接受益構文の意味構造: 「てやる」を中心に」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.5』 137-164. 東京: ひつじ書房.
- Levin, Beth and Tova R. Rapoport (1988) Lexical subordination. *CLS* 24: 275-289.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』 114: 37-83.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) Building verb meaning. In: Miriam Butt and Wilhelm Geuder (eds.) *The projection of arguments: Lexical and compositional factors*, 97-134. Stanford: CSLI.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) An event structure account of English resultatives. *Language* 77: 766-797.
- 斎藤衛 (2014) 「複合動詞の形成と選択制限: 他動性調和の原則を手掛かりとして」 岸本秀樹・由本陽子 (編) 『複雑述語研究の現在』 207-233. 東京: ひつじ書房.
- Shibatani, Masayoshi (1996) Applicatives and benefactives: A cognitive account. In: Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson (eds.) *Grammatical constructions: Their form and meaning*, 157-194. Oxford: Oxford University Press.
- Son, Minjeong and Peter Svenonius (2008) Microparameters of cross-linguistic variation: Directed motion and resultatives. *WCCFL* 27: 388-396.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語: モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』 東京: ひつじ書房.
- 由本陽子 (2013) 「語彙的複合動詞の生産性と2つの動詞の意味関係」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端: 謎の解明に向けて』 109-142. 東京: ひつじ書房.